

事前評価報告書

R5年8月30日(水)

研究種別	成長戦略課題	
研究課題名	下水汚泥等の肥料成分を活用した低コストで持続可能な施肥技術の開発	
研究期間	R6年度 ~ R8年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	3.8
2	研究内容の新規性	3.3
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.8
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.5
	総合評点	3.6
[評価所見]		
<p>・作物栽培に欠かせない肥料は、現在、そのほとんどを海外からの輸入品に依存している。市街地から排出される下水汚泥由来の既成肥料を栽培に利用する試みは、資源循環が叫ばれているこの時代のニーズにマッチした環境保全型農業を推進する研究テーマになると思われる。ただし、製品の原料となる下水汚泥の採取地域ごとにその成分や有害物質の含量が異なることも予測されることから、製品ごと(あるいはそれらのブレンド?)で安定した肥効を発揮させるための工夫も必要である。この課題の成果を基盤に、製品ロットごとに安定した利用体系をどのように構築するのか、現時点からアイデアを練っておく必要があると思われる。</p> <p>・とても重要な研究だと思います。一方で、県内で排出される汚泥をいかに処理すれば、質の良い肥料として県内で活用できるのかという研究も実施して欲しいと感じました。今後の研究成果を期待しています。</p> <p>・安全性・効果・コストの全てにおいて、生産現場への深い理解を獲得するため、安全性の実証研究に期待する。安心という観点からは、安全性が実証されても普及への深い理解を進める必要がある。現場において、一度出てしまった風評被害は信頼回復を積み上げる努力が何年もかかってしまうため慎重に進めていただきたい。</p> <p>・肥料高騰で化成肥料に代わりうる肥料になるかの研究と、入手が安易で価格が安く安定していて安全な肥料だということがわかり、農家が使うのに抵抗がないように研究してもらいたい。現在使用している農家の土壌検査だけでなく、実際使用してみたの収量や品質などのデータもあると現場で使いやすくなるので、そのあたりの研究もお願いしたい。大いに期待したい研究内容です。</p>		

事前評価報告書

R5年8月30日(水)

研究種別	成長戦略課題	
研究課題名	省耕起栽培による環境再生型有機農業の実証	
研究期間	R6年度 ~ R9年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	4.0
2	研究内容の新規性	4.0
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.8
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.5
	総合評点	3.8
[評価所見]		
<p>・農家の高齢化が顕著な現代において、省力化を見据えた技術開発は極めて重要である。また、有機農業で全国をリードする山梨県においてその様な技術開発が実施されることは、他県の有機農業をリードする技術革新につながることからその意義は大きい。必要最小限の労力で有機農業が展開できれば、高齢化時代に大きな効果を発揮することであろう。そのためにも、本課題内で「省力化」および「コスト試算」について取り組んで頂きたい。</p> <p>・これまでにない新しい知見が得られると期待しています。また、年々地力が上がり施肥量が下がるメカニズムの解明を期待しています。</p> <p>・有機農業の技術を普遍化し、栽培の体系化、低コスト化、安定生産に寄与できるよう期待したい。省力化できる結果につながれば栽培農家は大きなメリットとなる。みどりの食糧システム戦略の実現と栽培メリットにつながることを期待します。</p> <p>・省耕起栽培は省力化できそうですが、耕す部分と通路の部分があつて実際にそれを何年もやって土にどういう影響が出るのか気になります。果菜類で追肥するとき通路に追肥しますが、この栽培方法ではどのように追肥するのか？マルチの隙間から？などと疑問がありますが、品目によっては期待できる方法なのでそのあたりの研究もお願いしたい。</p>		

事前評価報告書

R5年8月30日(水)

研究種別	成長戦略課題	
研究課題名	施設トマト栽培における「茎えそ細菌病」の感染防止対策技術の確立	
研究期間	R6年度 ~ R8年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	4.0
2	研究内容の新規性	3.8
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.5
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.5
	総合評点	3.7
[評価所見]		
<p>・トマト産地に多大な被害を引き起こしている全身枯死の細菌性病害は抜本的な対策を講じない限り後を絶たない。まずは、県内で発生するかいよう病を含めトマトの細菌性病害を包括的に捉え、その中での茎えそ細菌病の実態を把握することが重要である。本病は、既に関東東海地域内の他県でも調査が進んでいる病害でもあることから、それらの成果を参考に山梨県に発生する本病害の実態を調査することが望ましい。特に、トマトかいよう病等との識別法については既存の血清診断技術や他県の成果情報等も十分参考になるものと思われる。いずれは、本課題で明らかにされる伝染環や防除対策などを取りまとめ、「トマト茎えそ細菌病対策マニュアル」のような普及冊子を作成することを念頭に研究課題を遂行していくことが重要と思われる。</p> <p>・県内分布と汚染経路の解明はとても重要だと思います。かいよう病防除で使用されている農薬の茎えそ病への効果を確認し、茎えそ病への適用範囲拡大につなげていただければと思います。</p> <p>・県内でも確認されている。全国的に課題となっている細菌性病害であり、かいよう病などと共に、生産不安定要因となっているため、現場要望が強く早急な対策が必要である。今後、栽培面積の維持拡大できるように、研究成果の活躍を期待します。対策マニュアル作成による周知は野菜産地の維持・活性化につながる。</p> <p>・茎えそ病の感染防止対策は必要な研究だと思います。茎えそ病とかいよう病の違いが分かりにくいいため両方に効く消毒の発見が出来れば現場でその消毒だけすれば良いので、その研究もしてもらいたいと思います。病害発生時に判断可能になり効果的な対策がとれるようになると産地の維持にもつながる大事な研究だと思う。</p>		

事前評価報告書

R5年8月30日(水)

研究種別	県単	
研究課題名	需要期に応じた切り花有望品目の安定生産技術の確立	
研究期間	R6年度 ~ R9年度	
	評価項目	評価点
1	研究の必要性	3.5
2	研究内容の新規性	3.8
3	研究目標、研究計画の妥当性	3.5
4	研究体制、研究予算の妥当性	3.5
	総合評点	3.6
[評価所見]		
<p>・県オリジナルの「ふじさんアジサイ」を代表として、それぞれの地形に適した品目を選定し、効果的な栽培技術を開発することは、花き生産を振興する基盤技術として欠かせない。また、多くの花き類生産農家が女性や高齢者であることから、露地栽培における生産体系を基本とした栽培技術の開発は、現状を直視した取組として評価できる。各品目のニーズの大きい時期に適した出荷体系を提案するためにも技術サイドからのアプローチは重要である。また、本課題の成果物が切り花であることに着目し、冠婚葬祭関係者の意見を参考にしながら、山梨県オリジナルの「ふじさんアジサイ」を中核とした各種切り花との組み合わせモデルをいくつかデザインすることで、消費者心理が刺激され新たな市場の開拓につながる可能性があるかも知れない。</p> <p>・コンセプトが素晴らしいのでぜひ実現に向けて研究を進めていただければと思います。華やかな花束を作製するための華やかな花きの種類について、より生産者ニーズに沿った種類も追加で加えてもいいのではないかと感じました。</p> <p>・生花市場は、他の作物と比較すると、限られた時期に集中した需要で、そこを狙う観点は素晴らしい。一方、労働力を需要期に集中させるため、新たな品種の発掘や需要の創出も期待する。例えば、視覚的観点だけではなく嗅覚的な特徴など消費者層の幅を広げたい。</p> <p>・夏は露地で、えぞ菊以外の栽培は難しいところがあるので、簡単に作れる花があるなら期待したい研究。ふじさんアジサイとえぞ菊を軸に、スターチスやトルコギキョウ、ダリアを花束にするのは良いと思うので、えぞ菊位簡単に作れるかどうかの研究をお願いしたいです。最近の高温で栽培体系も変わってきていると思うのでその辺も加味した研究をしてもらいたいです。</p>		

中間評価報告書

R5年8月30日(水)

研究種別	成長戦略課題	
研究課題名	データセンシングを活用したキュウリ養液栽培における増収技術の確立	
研究期間	R4年度～R6年度	
	評価項目	評価点
1	研究計画の進捗度及び今後の研究計画の妥当性	3.8
[評価所見]		
<p>・本課題は、山梨県におけるスマート農業の代表事例として、50t/10aの収穫が達成できるキュウリの栽培体系を確立するところにある。そのために、現実的に許される範囲で組み込むいくつかの技術の連携によりそれら効果の最大化を図る必要がある。これまでに、品種、耕種方法、炭酸ガス濃度などの必要な個々の情報が蓄積されてきた。残された期間で作型を確定することで経営評価に連携を図ることが可能になる。それにより「データセンシングを利用したキュウリ養液栽培マニュアル」が開発されるものと期待される。</p> <p>・本研究は、今一度目的を明確にしたほうが良いと感じました。経営評価についての成果を期待しています。</p> <p>・技術確立の一端に直結するCO2の効果的な使用方法の確立を期待します。日照時間の短い冬季に、光合成レベル低下による収量低下が見込まれる場合は、将来的ステップとして、LED電照導入と使用法などの研究も将来的には検討いただきたい。</p> <p>・つるおろし栽培や炭酸ガスの施用方法で増収効果が出てきたりと50t/10aの目標達成はできると思う。これらの方法を用いて増収する方法にかかる費用、ランニングコストがどのくらいかも、しっかり表してほしい。</p>		

中間評価報告書

R5年8月30日(水)

研究種別	成長戦略課題	
研究課題名	根深ネギの安定的な周年出荷技術の確立	
研究期間	R4年度 ~ R6年度	
	評価項目	評価点
1	研究計画の進捗度及び今後の研究計画の妥当性	4.0
[評価所見]		
<p>・本課題の最終目標は、多様な立地条件を活用することで周年出荷できるネギのリレー栽培体系を県内に確立することにある。そのためには、各地に適合した品種および作型を確定し、栽培マニュアルを作成することが重要である。それらに加え、県内各地を結んだリレー体系を表した分かりやすいフロー図なども同時に作成し関係者間で認識を共有することが、県内産ネギのブランド「甲斐のぎゅぎゅっとねぎ」の普及促進に重要と思われる。それと、ネギの同一圃場における周年栽培では、全国のどの産地でも必ずと言って良いほど土壌病害に悩まされている。他県のネギ産地の情報も収集し、それら土壌病害の防除対策も予め検討に加えておくことが重要と思われる。</p> <p>・様々な品種が試験されており、周年出荷の可能性がよく分かりました。今後は、生産者のニーズに沿いながら実用化に向けたマニュアル作りにも期待しています。</p> <p>・産地が拡大することで冬の野菜産業に注目されることに期待します。</p> <p>・県内でも年間を通して収穫ができる作型の研究は、県内産のねぎを流通させるには必要だと思う。まだまだ、県内産のねぎの流通が少ないので、もっと生産農家を増やせるように技術を確立して、今後農家に繋げてほしい。</p>		